



京都科学哲学コロキウム30周年記念の会の報告

美濃 正 (30周年記念の会発起人の一人・大阪市立大学)

京都科学哲学コロキウム(Kyoto Colloquium for the Philosophy of Science)については、本学会においても、古くは『科学哲学』第20号(1987)で中才敏郎氏が、最近では「ニュースレター No.18」(2001)で小林道夫氏がその活動を紹介されており、ご存じの方も多いことと思います。主として関西方面の、科学哲学・分析哲学に関心を抱く人々が集まって続けているインフォーマルな研究会ですが、2005年に、発足後30年(正確には31年になります)という節目の年を迎えました。そこで、10月30日に、普段、研究会場としている京大会館において、30周年記念の会を開催しました。その様子をご報告します。

記念の会には、発起人の予想をはるかに上回る数多くの方々のご参加下さいました。特に、吉田夏彦氏と野本和幸氏は、ご多忙の中、ゲストとしてわざわざ東京から足をお運び下さいました。また、(後ほど中身を紹介します)シンポジウムのパネリストとして、戸田山和久氏と伊勢田哲治氏は名古屋から参加して下さいました。(藤本隆志氏と山田友幸氏は、ご参加はいただけませんでした。お祝いのメッセージを寄せて下さいました。)それ以外にも、古くからの会員(その中には、勤務地などの関係で最近あまりお見えにならなかった懐かしい方々も多くいらっしゃいました)をはじめとして、老若男女を問わず多くの会員そして非会員が、関西はもちろんのこと四国・中国・中京さらには関東方面からも参

加して下さいました。あくまでも発起人の概算ですが、参加者の総数は100名近くにのぼったものと思われまます。この場を借りまして、参加者の方々にはあらためて御礼申し上げます。

さて、記念の会ではまず、「科哲コロキウム」(これは会員の間での略称であり、愛称でもあります)発足当初からのメンバーである竹尾治一郎氏と神野憲一郎氏が記念の講演をなさいました。竹尾氏は「京都科学哲学コロキウム30周年によせて - 回想と反省 - 」と題する講演の中で、まず、コロキウム発足前後の状況に関する思い出を、ご自身がその発足にどのように関わりどのように関わらなかったかを含めて、語られました。次に、戦後ほどなく日本に導入された科学哲学(あるいはむしろ科学的哲学)が、その後アメリカの科学哲学を範としてどのように発展させられていったかについて、ご自身が参加された「アメリカ研究セミナー」の思い出などをまじえながら詳しく語られました。そして最後に、欧米における科学(的)哲学の展開(あるいは転回)過程を日本の科学(的)哲学さらには科哲コロキウムのそれと重ね合わせながら、そこから汲み取るべきモラルの要点は、科学的エトスを共有しつつも科学哲学自体についての多様な見解の並存を認めることにあるだろうと指摘して講演を結ばれました。

続いて、神野氏が「分析 - 昔と今 - 、30周年に際して」と題して講演されましたが、氏はまず科哲コロキウム発足以前の関西(特に京都)の哲学

界で科学哲学・分析哲学がいかに異端視されていたか、個人的な回想をまじえながら語られました。また、コロキウム発足の経緯については、故富川滋氏（近畿大学）の熱心な働きかけもあり、故武田弘道氏を中心とする当時の大阪市立大学哲学科が主たる担い手となってコロキウムの最初の組織化を行ったこと、「京都科学哲学コロキウム」という名称は神野氏ご自身の提案であったことなどを語られました。次に、神野氏は、科学哲学・分析哲学が事とする哲学的分析に関して、一つの注意を喚起されました。つまり、ある種の事柄の分析に有効な概念が見つかる、それを他の種類の事柄の分析にも一般化して適用しようとする傾向があるが、これは必ずしもうまくいくとはかぎらないという注意です。その具体例として、氏のご専門であるヒュームの情念論・道徳論についての最近の分析を取り上げ、これらの分析のように「認知説/非認知説」あるいは「外在主義/内在主義」といった概念枠を用いたのではヒュームの立場は十分には捉えきれないと論じられました。そして、既存の分析枠組に依存するのではなく、事柄そのものについての（場合によっては科学的な）知見に即して、新しいより適切な分析枠組を見出していくことの重要性を説かれました。

お二人の記念講演に続いて、科学的事実論をテーマとするシンポジウムが行われました。まず、戸田山和久氏が近著『科学哲学の冒険：サイエンスの目的と方法をさぐる』にもとづいて、新

しいタイプの科学的事実論を擁護する議論を提示されました。氏の議論の要点は、科学理論の「意味論的捉え方」をとおして、科学の目的を实在によりよく類似するモデルを作ることとして捉え返すことが可能になるとともに、自然主義的立場から科学的事実論を「メタ正当化」（認識論的正当化）するための見通しも得られる、という点にあるものと理解されました。戸田山氏の提題発表に対して、小林道夫氏がより徹底的な科学的事実論の立場から、伊勢田哲治氏が戸田山氏の実論は「冒険のしすぎ」ではないかとする、やや反実在論よりの立場から代表質問をされました。続いて、フロアをまじえたディスカッションに移りましたが、予定時間を過ぎるほど数多くの質問が出され、それらの質問についてパネリスト同士の間でもパネリストとフロアの間でも中身のある応酬がかわされる実り多い討論となりました。

30年という節目を過ぎましたが、これまでの活動の成果を受け継ぎつつ、派手なことはできませんが今後とも着実な研究会活動を継続していきたいと考えております。関西における科学哲学研究の一つの拠点として、東西の研究交流の場として、さらには外国人研究者との交流の場として、果たすべき役割をよりよく果たしていくことができるように地道な努力を続ける所存です。科学哲学学会の会員の方々にも、今後とも「科哲コロキウム」をよろしく申し上げます。



会務報告

(2005.4.1 ~ 2006.3.31)

日本科学哲学会第11期理事会

第9回

日時：2005年7月2日(土) 13:30 ~ 14:30

議題：1. 新入会員・退会会員について

2. 第38回大会（於東京大学）
準備状況について

3. その他

名簿について

第10回

日時：2005年10月1日(土) 13:30 ~ 14:30

議題：1. 新入会員・退会会員について

2. 次期編集委員長について
3. その他
寄付金について

第11回(第4回大会実行委員会合同会議)

日時:2005年12月3日(土)12:15~13:30

- 議題:1.新入会員・退会会員について
2.2004年度収支決算について
3.2005年度収支予算について
4.来年度(第39回)大会について
5.寄付金について

第12回

日時:2006年3月25日(土)13:50~14:50

- 議題:1.石本基金の運用方法について
2.新入会員・退会会員について
3.Alan Hajek氏の講演会について
4.役員選挙について

『科学哲学』38巻編集委員会

第2回

日時:2005年7月2日(土)14:45~15:45

- 議題:1.応募論文の審査状況について
2.『科学哲学』38巻1号版下作成状況について
3.新しい論文審査基準案について
4.依頼中の書評について

第3回

日時:2005年10月1日(土)14:45~15:45

- 議題:1.論文審査状況について
2.『科学哲学』38巻2号製作状況について
3.新しい論文審査基準の開始時期について
4.書評について

第4回

日時:2005年12月4日(日)12:30~13:30

- 議題:1.論文審査状況について
2.『科学哲学』38巻2号の製作状況について
3.第38回大会について

第38回大会実行委員会

第2回

日時:2005年7月2日(土)16:00~17:00

- 議題:1.第38回大会のプログラムについて
特別講演について
シンポジウムについて
ワークショップについて

第3回

日時:2005年10月1日(土)16:00~17:00

- 議題:1.プログラムについて
研究発表の司会について
会場について
発表用機材について

『科学哲学』第39巻編集委員会

第1回

日時:2006年3月25日(土)15:00~16:00

- 議題:1.『科学哲学』第39巻1号の製作状況について
2.応募論文審査状況について
3.審査手順について
4.書評について
書評対象となる図書について
書評者の追加および書評図書の追加

第39回大会実行委員会

第1回

日時:2006年3月25日(土)16:15~17:15

- 議題:1.シンポジウム、ワークショップの決定
2.特別講演会について
3.大会スケジュールについて
4.事務手続きについて



会計報告

【2004年度決算】

収入：前年度繰越金	2,044,123
学会費納入	2,572,000
大会参加費	179,000
学会誌売上	64,515
預金利息	6
出版社著作権協議会分配金	24,000
合計	4,883,644

支出：『科学哲学』37巻1号制作費	451,220
『科学哲学』37巻2号制作費	526,295
ニューズレター制作費	43,000
第37回大会運営費	298,020
通信費	219,230
印刷費	87,685
消耗品費	90,008
委員会交通費	30,000
事務局費	38,860
事務局補助給与	480,000
アルバイト代・手数料	95,730
小計	2,360,048
次年度繰越金	2,523,596
合計	4,883,644

【2005年度予算】

収入：前年度繰越金	2,523,596
学会費納入	2,200,000
大会参加費	200,000
学会誌売上	100,000
預金利息	100
出版社著作権協議会分配金	40,000
合計	5,063,696

支出：『科学哲学』38巻1号制作費	500,000
『科学哲学』38巻2号制作費	500,000
ニューズレター制作費	100,000
第38回大会運営費	300,000
通信費	200,000
印刷費	200,000
消耗品費	60,000
委員会交通費	150,000
事務局費	100,000
事務局補助給与	480,000
アルバイト代・手数料	100,000
小計	2,790,000
予備費	2,273,696
合計	5,063,696



寄贈図書紹介

森本浩一著

『デイヴィッドソン 「言語」なんて存在するのだろうか』 NHK出版

『大学教育学会誌』第27巻第1号、第2号 大学教育学会

野矢茂樹著

『他者の声 実在の声』 産業図書

『日本イギリス哲学会30年史』 日本イギリス哲学会

大林雅之著

『生命の淵 バイオエシックスの歴史・哲学・課題』 東信堂



学会・研究会予告

日本科学哲学会第39回大会

【期日】2006年10月21日(土)・22日(日)

【場所】北海道大学・札幌キャンパス

科学基礎論学会2006年度総会

【期日】2006年6月17日(土)・18日(日)

【場所】電気通信大学



訃報

2006年4月14日に、名誉会員の澤田允茂氏が逝去されました(享年89歳)。氏は、長年にわたり本学会の会長をお務めいただくなど、多大なご尽力を賜りました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



事務局からのお知らせ

1. 【重要・訂正】

日本科学哲学会第12期役員選挙の投票用紙を5月24日に選挙権のある会員の方々にご送付いたしました。これについて下記のような訂正がありますのでご注意ください。
投票用紙氏名欄にあげられております以下の会員は、名誉会員につき、被選挙権を有していません。

川野洋、黒崎宏、坂本百大、高松鶴吉、竹尾治一郎、吉田夏彦

これら6名の方々にはご投票をお控えくださいますようお願いいたします。

詳しくは選挙権のある方々にすでにご送付した「第12期評議員選挙用紙の訂正について」をご覧ください(ホームページにも掲載してあります)。

会員の皆様には大変ご迷惑をおかけし申し訳ございません。また、名誉会員の方々にも深くお詫び申し上げます。よろしくご理解ご協力くださるようお願い申し上げます。

なお投票期日は7月3日ですので、それまでに必ずご返送ください。

2. 2006年度分の学会費をお納め下さいますようお願い申し上げます。貴台の(今年度分を含めた)学会費未納分合計金額に相当する数字が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さいますようお願い申し上げます。なお、「-」表記の方は完納となっております。

3. 事務局の置かれている「機関名」が、2006年4月より次のように変更されました。

(旧)東京都立大学 人文学部 哲学科内 日本科学哲学会

(新)首都大学東京大学院 人文科学研究科 哲学教室内 日本科学哲学会

なお、郵送等の際に旧来の機関名を使用しても特に問題はありませんので、ご安心ください。また、住所・メールアドレスには一切変更ありません。



編集後記

たいした仕事をしたわけではないのですが、それでも5年かそこらはこのニューズレターの編集委員長をさせていただきました。今回で晴れてお役ごめんとなります。思えば昨年は科学哲学学会の大会実行委員長なども仰せつかり、そうそう、それについては、塩谷賢さんの強力な援護をはじめ多くの方々のご協力のおかげで、一部の方にどうやら風邪を引かせてしまったらしいこと以外は大過なくとりおこなうことができ、まことに感謝の念にたえないところですが、それにしても、私としてはもう一生分の貢献はしたと考えているということは、ここに強調しておきたいところです。そこで、次の方として、少し西の方面に振ろうと思って美濃正さんをお願いしたところ、断られました。しかしすばらしいことに、「罪ほろぼし」と言われて、今回の原稿を書くことを引き受けてくださったのでした。一説によると、大き目の要求を提示して、相手が難色を示したところでそれより小さいお願いを、というテクニックがあるそうですが、いったい、たとえばつきあってもいない相手に「結婚してください」と申し出て、断られたら「じゃあデートして」と言ったところで効果はあるのでしょうか。私には分かりません。ええと、それで、次回からのニューズレターの編集委員長はもっと若い人にしようよという話になって、伊勢田哲治さんをお願いしたところ、実にご快諾いただけました。ニューズレターという多少は気楽な媒体のゆえにいささかお目汚しな文章を書き続けてきてしまったことをお詫びし、それでは、伊勢田さんにバトンタッチさせていただきます。

(野矢茂樹)

日本科学哲学学会ニューズレター No. 33 2006年5月20日

編集兼発行 日本科学哲学学会

事務局 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

首都大学東京大学院 人文科学研究科 哲学教室内

Fax. 042-677-2073【宛名「日本科学哲学学会」明記のこと】

e-mail. philsci@comp.metro-u.ac.jp

URL. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/pssj/index.html>

印刷 文成印刷 〒168-0062 東京都杉並区方南 1-4-1